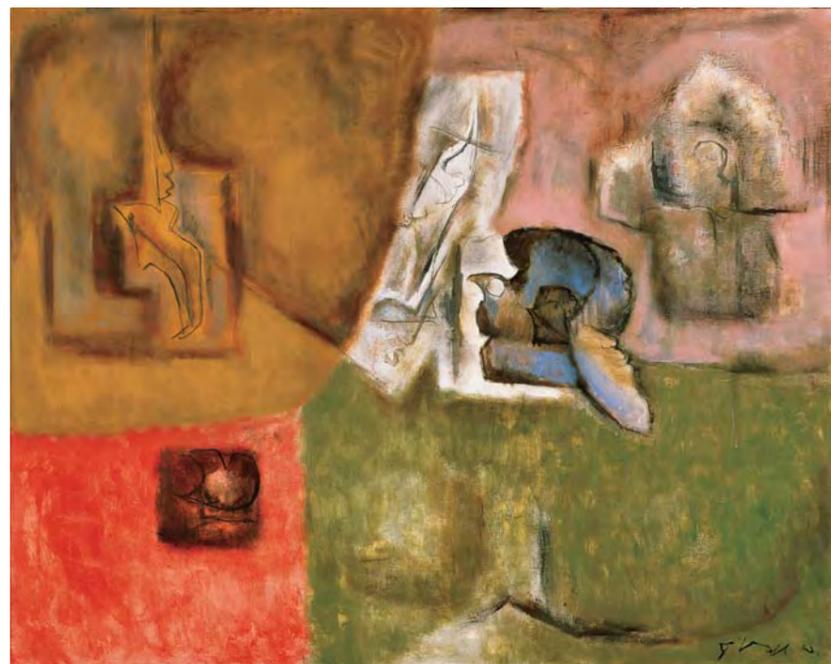


寄附受納記念

脇田 和展 「鳥に詠う」



脇田和《四色の季節》1997年 油彩 キャンバス
—脇田和展—より

■ 名物裂と香道具

前田育徳会尊経閣文庫分館

■ 加賀文化の粋

第2展示室

■ 新収蔵品展

第3・4展示室

■ 春の優品選

第5展示室

■ 優品選 テーマは爽

第6展示室

- 土曜講座について
- 春のミュージアムウィーク
- 山崎百々雄さんをご存じないですか？
- 5月の行事予定

- 広坂別館・石川県保存修復工房
- お客さまアンケートから
- アラカルト ただいま展示中

アラカルト ただいま展示中

à la carte No.11

石川県指定文化財 山水図 紙本墨画 6曲1双
各隻縦159.0cm×横360.0cm 室町16世紀

伝 狩野元信 かとう・もとのぶ
文明8年～永禄2年(1476～1559)



(右隻)

五世紀の中国で「山水は美しい形をもって人々を目に見えない道に近づける。それゆえに、その山水を描いた絵画には、書物をもつてする以上に深い自然への洞察を促す力がある」という思想が浸透していきます。この思想を背景に、中国では山水が深い精神性の表現に最も適した画題と認識され、なかでも水墨による山水の名作がその後数多く描かれました。

日本への影響はすでに八世紀の正倉院宝物に認められることができますが、特に十四世紀以降に見られる禅宗の興隆と書院造建築の発達は、大画面の水墨山水図の新たな需要を生みます。そこで、俗世間を離れて静寂な山中で隠遁生活を送りたいとの発注者の理想を基盤として、中国の有名な景勝地の要素も加味した山水図が一般的な様式のひとつとなりました。

かつて前田家に伝来した本作も、そのような流れの中に位置づけることができます。画面右から左に四季の推移を示し、「瀟湘八景図」を意識した描写も認められます。「元信」の印が押されていることから、室町時代に狩野派の基盤を築いた狩野元信、あるいは周辺の画家が描いたものと判断されます。

次回の展覧会

前田育徳会
尊経閣文庫分館

第2展示室

名物前田藤四郎と
甲冑・陣羽織

岸派の絵画

会期:5月19日(木)～6月12日(日) 会期中無休

第3～9展示室

改組新 第2回 日展 金沢展

会期:5月21日(土)～6月12日(日) 会期中無休

ご利用案内

コレクション展観覧料

一般 360円(290円)
大学生 290円(230円)
高校生以下 無料
※()内は団体料金
毎月第1月曜日はコレクション
展示室無料の日(5月は2日)

今月の開館時間

午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間

午前10:00～午後7:00 年中無休

5月の休館日は
16日(月)～18日(水)

ガン保険

チュール生命「終身ガン治療保険プレミアム」

通院治療が増加している時代の、
画期的なガン保険

今、ガン保険にご加入されている方も、
ご加入されていない方も今すぐチェック！
通院料 無料

既にガン保険にご加入されている方に

●主契約:放射線治療給付金、抗がん剤・ホルモン剤治療給付金(給付月額20万円)

●保険期間:保険料払込期間:終身

月払保険料 1,500円

追加のご加入で、ガンの通院治療の保障を充実

●保険期間:保険料払込期間:終身

●特約:ガン先進医療給付金(一括15万円)、ガン先進医療支援給付金(一括50万円)、ガン診断給付金(一括50万円)、悪性新生物保険料払込免除

●保険期間:保険料払込期間:終身

月払保険料 1,500円

40歳以上

月払保険料 3,216円

ZURICH チュール生命

(募集代理店) 株式会社ニートン・フィナンシャル・コンサルティング
〒160-0022 東京都新宿区新宿5-17-18
TEL:160-0022

0037-6001-61910

※一部の固定電話から繋がらない場合がございます。恐れ入りますが携帯電話等でおかけください。
※記載の保険料は2015年6月現在のものです。※この欄は商品の概要を説明しています。商品の詳細については、パンフレット、ご契約に関する注意事項(契約概要、注意喚起情報)等をご確認ください。

石川県立美術館だより
第391号(毎月発行)
2016年5月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel:076(231)7580
Fax:076(224)9550
URL http://www.ishibi.pref.shikawa.jp/

一鳥に詠う

主催：石川県立美術館 協力：一般財団法人協田美術館 後援：北國新聞社

学芸員の眼

引目鉤鼻を大辞林で引くと、「人物の描き方で、下ぶくれの顔に目は墨で細長く描き、眉は細い墨の線を何本も引き重ね、鼻は短く「く」の字に描き、口は朱を点するもの。「源氏物語絵巻」など、大和絵の特徴をなす。」とあります。これはまさに協田和が描く男女の顔そのものではないでしょうか。協田はドイツの美術学校で学び、作風も瀟洒で、西洋との関係で作品を考えがちになりますが、むしろ平安の絵巻などに原点があるのではないのでしょうか。擦れがちな絵肌は古典絵巻の美しい剥落や汚れを思い起こしますし、遠近法などは眼中になく、装飾性と象徴性に富み、モチーフが等価に並べられたり、異なる場面や時間が同時に描かれたりもする画面構成は、協田が長くドイツで学ぶことにより、自己の存立を日本美の伝統に根ざすものと、強く考えたからではないでしょうか。

近現代・日本洋画壇を代表する画家、協田和の作品三一七点を、一般財団法人協田美術館から寄附いただいたことを記念し、「協田和展 鳥に詠う」を開催いたします。

協田和は明治四十一年（一九〇八）、父協田勇、母子の次男として東京に生まれました。兄弟は後に十二人となり、和は三番目の上には兄と姉がいます。父は実業家で貿易商社を経営し、また美術や芸事にも熱心で、和は幼い頃より書画骨董に囲まれて育ちました。祖母から墨絵の手ほどきを受け、家に代々伝わる鳥の写生帳を臨画するなどしています。後に協田は鳥を生涯のテーマとしますが、この時の臨画に遠因を求めることができるかもしれません。

大正十二年（一九二三）、姉が結婚しドイツに行くことになり、十五歳の和は同行し、八年間の留学生生活が始まります。一九二五年ベルリン国立美術学校に入学し、ドイツ流の厳格なデッサンやリトグラフ、エッチング、木口木版等の版画技法を学ぶのです。卒業は一九三〇年、学校から金メダルを卒業証書と共に受けています。しかし、同時期父勇が死去し、ま

た長兄は関東大震災で既に没しており、帰国後の協田は、一家の長として、会社経営をこなしつつ画業を続ける生活が、この後十年ほど続くこととなります。

光風会や帝展に出品を続けるのですが、この頃同年代で志賀町出身の南政善とグループ展を開くなど親交を持ったりもしています。大きな転機は、昭和十一年、帝展改組による画壇の混乱期に、小磯良平、猪熊弦一郎などと共に新制作派協会を創立したことです。以後協田は同協会展に清新でモダンな作品を発表し続けていくのです。

戦後は新制作協会展をはじめ、サンパウロビエンナーレやサロン・ド・メ、ベネチアビエンナーレなどの国際展に出品して、高い評価を受けました。また国内では各種展覧会出品や個展を開催するとともに、東京藝術大学で教鞭を執り、後進の指導にもあたっています。昭和四十五年に軽井沢にアトリエを築き、平成三年には同地に協田美術館を建設。制作は油彩、水彩・素描、版画など幅広く、日本絵画史に大きな足跡を残しています。作品は、鳥や子どもをモチーフに、温かみのある色彩と堅固な構成とが融合し、詩情溢れる世界を



《二人》1942年



《窓際の瓜》1974年



《落花》1952年



《画房夢想曲》2000年

寄附受納記念

協田和展

4月24日(日)～5月15日(日) 会期中無休

築き上げています。平成十年に文化功労者となり、十七年（二〇〇五）、九十七歳で逝去されました。

なお協田和の先祖は加賀藩士で、平成十五年には石川県立美術館で「鳥と語る―詩魂の画家―協田和展」を開催するなど、石川県とゆかりの深い作家です。

展示では、協田和の油彩画の代表作をはじめ、素描・版画を交え、一五〇点で協田和の世界をご堪能いただけます。

【関連イベント】

■特別講演会「僕が知っている協田さん」

講師／野見山暁治氏（洋画家・文化勲章受章者）
日時／五月一日(日) 午後一時三〇分
会場／石川県立美術館ホール（定員二〇九名）
聴講無料・申込不要（先着順）

■ギャラリートーク

日時／四月三十日、五月一日・二日・八日・十五日
午前十一時
要観覧料・予約不要

◆料金表

一般	八〇〇円(六〇〇円)
大学生	六〇〇円(四〇〇円)

高校生以下無料。（内は二〇名以上の団体料金。）
※当館友の会員は、会員証の提示により団体料金に割引されます。

※本展チケットの半券提示により、七月五日から十月二十六日の間、軽井沢の協田美術館にて入館料・ミュージアムショップ&カフェの優待サービスがご利用できます。

前号では展示の概要について紹介しましたので、今回は名物裂のなから、金襴と緞子の作品を中心に紹介します。

「金襴」は、金糸を織り入れて文様を織りだしたもので、その豪華な趣から名物裂のなかでも最も尊ばれ、最高位に位置付けられて、また最も多くの種類があります。中国では織金と呼ばれ、ほぼ宋代に織り始められたと考えられています。その風合いや趣から茶入の仕覆としてよりも、書画の表装裂として使用されています。《興福寺金襴》は興福寺の戸張に使用されたという伝承を持つ裂で、古渡りよりもさらに古い「根抜け」（宋代）といわれる裂は、格別に珍重されてきたものです。紫地小石畳文の三枚綾地に、金箔糸あるいは銀箔糸を織り入れて互の目に配された宝珠文のなかに鳳凰を

組み合わせさせた文様を表した風格のある裂です。《富田金襴》は蘇芳地に靈芝雲を連続して配し、その間に宝尽くしを散らした金襴で、豊臣秀吉に仕えた戦国の武将茶人富田左近將監所用と伝わるにふさわしい雄渾な華やかさがあります。

「緞子」は、縦糸と緯糸に異なる色糸を用いて文様を織り出したもので、金襴に次いで注目される裂です。金襴とは対照的なしなやかな風合いと美しい光沢、落ち着いた趣が特徴です。《笹蔓緞子》は萌黄地に金茶で笹蔓に松毬と六弁花を表した瀟洒な文様で、その穏やかな色調は清楚で格調が高く、茶人に好まれ、茶入の仕覆などに珍重されました。

そのほか江戸時代の「いき」の美意識に通ずる「間道」や、エキゾチックな「モール」に、優雅な香道具を合わせて展示しています。

前田育徳会尊經閣文庫分館

名物裂と香道具(後期)

4月23日(土)～5月15日(日) 会期中無休

《雲繫ぎ宝尽し文様金襴(富田金襴)》

第2展示室

加賀文化の粋(後期)

4月23日(土)～5月15日(日) 会期中無休

今回は、加賀文化をより広い視点から概観したいと思えます。幕藩体制の中で前田家が打ち出した、文化による地域の独自性の表明は、明治維新から今日に至る石川県や金沢市の在り方を強く方向づけました。美術工芸の分野に目を向けると、明治維新により旧藩に依存していた御用職人や町職人は失業しました。そこで彼らの救済と工芸技術の保存を目的とした開拓所が設置され、その活動はやがて石川県勸業試験場、石川県勸業博物館に引き継がれ、美術工芸の発展と、人材の育成が図られました。そして万国博覧会の時代を見据えた輸出振興策によって生産基盤が整備され、金沢工業学校の創立とあいまって今日の「美術工芸王国」の基礎が築かれました。さらに能楽や茶の湯も振興し、洗練された美意識が美術工芸の技術を支えるという美の好循環が生まれました。

そして、一八七三年の尾山神社創建を契機として、百万石文化の基礎を築いた藩祖・前田利家を再評価する機運が高まり「加賀百万石」は、ある種の憧れを喚起する響きをもって当地のイメージを形成してきました。さらに当地の歴史と伝統への自負は、幕末から明治時代初期に一旦流出した美術工芸品の個人による買い戻しや、当地には直接関わりがない名品の収集などの文化活動へと結実し、加賀文化の精神が様々な人々によって主体的に継承されたことを示しています。当館の活動も、このような文化土壌を基盤としているということが出来ます。今回のタイトル「加賀文化の粋」は、真髓としての優品選との意味ですが、そこに文化の担い手となった人々の思いも感じただければ幸いです。



《青貝柳水鳥図角盆》明16世紀 前田家伝来

第5展示室

春の優品選 [工芸]

4月23日(土)～5月15日(日) 会期中無休

松田権六の代表作《蓬萊之棚》からおよそ三〇年後に制作された、《流水桜文蒔絵神代櫓棹》を展示いたします。波うつ水流は金蒔絵、きらめく水面は青貝で表現されています。螺鈿・金平文を用いた華やかな桜文は、しっとりとしたつやに覆われ、まるで水を含んだかのようなようです。左右対称に開ききった桜文は、松田がくり返し用いた図様の一つでした。参考になったと考えられるのは、松田権六・羽野頼三『時代櫓大観』(寶雲舎、一九三九年)にも所収されている通称《明月櫓》。安土桃山時代、織田有楽斎が鎌倉・明月院に寄進したといい、百人分が揃う四つ櫓です。桜文のかたちに加え、ゆるやかな曲面に文様を定着させるため、螺鈿を細かく割り、貼り合わせ手法(割貝)も共通しています。李朝鮮から伝

わったとされるこの手法。本作は「ものに学ぶ」姿勢を大切に松田の、研究成果の一つといえるでしょう。また、水の流れがゆく木地にも注目ください。長い間地中に埋もれていた神代櫓を、きめ細かな木目を活かして成形しています。木地の成形は、川北良造が手がけました。見た目の繊細な美しさだけでなく、薄さ、手なじみのよさを兼ね備えています。さらに、新収蔵品の福田芳朗《神代櫓南天象嵌寿輪三段組重》を初出品いたします。こちらも神代櫓からつくられており、寸法が大きいため木目や独特の色合いを力ぶよく感じることができそうです。南天をやわらかく用いた象嵌によって、いっそうその魅力が引き立ちます。春の散策がてら、ぜひお立ち寄り下さいませ。



松田権六《流水桜文蒔絵神代櫓棹》

第3・4展示室

新収蔵品展 [絵画]

4月23日(土)～5月15日(日) 会期中無休

平成二十七年度、あらたに収蔵された近現代絵画等の作品を第3・4展示室にて紹介いたします。昨年度は、たいへん多くの絵画関係作品を一括ご寄附いただきました。脇田美術館から脇田和作品三十七点をご寄附いただいたことは既にご存知の通りです。その多くは同時開催の企画展「寄附受納記念 脇田和展―鳥に詠う―」での展示となりました。こちらは油彩画を中心に一五〇点を展示し、二階第3展示室で油彩画の小品と素描、版画を三十点あまり展示する予定です。それでも、まだ展示できない百点以上の作品は今後コレクション展の中で紹介していきますので折々にお楽しみください。そのほか個人コレクターの方からも小林敬生、難波田龍起、池田満寿夫ら三十五作家八十五点の現代版画優品のコレクションを一括してご寄附い

ただきました。これにより当館の版画コレクションは一気に厚みを増すことになりました。こちらも今後徐々に公開していく予定です。その他、日本画では木村杏園の耶馬溪を描いた画卷など七点、京都画壇で活躍した山本知克が生涯をとおして探求した静物画十三点、また先日急逝した金沢美術工芸大学教授西出茂弘の日展特選作二点も新収蔵となりました。油彩画では、現在石川の光風会を牽引している西田伸一の日展特選作二点と近作、同じく光風会の本山二郎の日展特選作や光風会展受賞作、いずれも緻密な人物画です。本年没後三十年にあたる高光一也の肖像画一点も加わり、当館の高光コレクションはさらに充実することとなりました。



西田伸一《思秋》

第6展示室

優品選 [絵画・彫刻]

—テーマは爽—

4月23日(土)～5月15日(日) 会期中無休

本展が開催される、四月末から五月中旬にかけての時期は、目にも鮮やかな新緑に陽光が広がる季節から、初夏の風を感じるようになる清々しい時期といえましょう。そんな心地よい季節に合わせ爽快な気韻とも共鳴する美とのひとときをお楽しみいただきたいと思います。以下で、日本画・洋画・彫刻各ジャンルの主な展示品を紹介いたします。日本画の中出信昭《二人の航海》は、帆船に乗った兄弟と思しき二人の子どもが光差す海に向かって進もうとする様子を描いたものです。海からの風に胸を張って立ち向かうその後ろ姿には、少年の冒険心と明るい未来への希望を感じさせているといえましょう。

洋画部門の村田省蔵《丘》は、北海道の雄大で彩り豊かな大地を描くものです。夏雲が浮かぶ空を突くようにポプラの大樹を配し、麦秋の黄金色をはじめとする色彩面構成により、広大な空間を吹き抜ける爽快な風を感じます。また宮本三郎《朝の湖》は、小品ながらも印象派風の画面一杯に光溢れる作品です。絵の具の粗いタッチが朝日の強い光の表現に奏功するとともに、空間を突き抜けるような広がりを感じさせる作品となっています。彫刻部門の晝間弘作《朝》は、朝日を浴びる若い女性が佇む姿を表した木彫作品です。爽やかな朝の凜とした空気のなかあつて、女性の洗練とした若さを感じられるとともに気品溢れる作品となっています。



中出信昭《二人の航海》

平成28年4月24日 オープンします

広坂別館・石川県文化財保存修復工房

東日本大震災での被害の例を出すまでもなく、今ある文化財を次世代へ伝えることは、現代に生きる私たちの使命と一言でも過言ではありません。文化財修復事業の重要性や、伝統的な修復を行い、その技術を伝えていくことの大切さを、一人でも多くの方にご理解いただきたいと願っています。



美術館や博物館などで私たちが目にする、書画や彫刻、工芸品などの文化財は、長い年月を経る中で、様々な要因によって傷みが生じます。これらの損傷に対して、その都度適切な修復が施されてきたことにより、今日文化財が、私たちの前にその姿を留めていると言えるでしょう。

石川県文化財保存修復工房は石川県立美術館の附属施設として、県内に多数存在する文化財の修復に対応するため、平成九年（一九九七）に石川県庁出羽町分室に設立されました。県内のみならず他県からの修復依頼も増え、着実に実績を積み上げてきましたが、このたび建物の老朽化に伴い、石川県立美術館広坂別館に隣接する形で平成二十八年四月に新設リニューアルいたしました。

新しくなった保存修復工房では、修復作業の様子をガラス越しに見学することができます。また関係者だけでなく一般の方々にも、貴重な美術工芸品を陰で支える保存修復事業を知っていただくため、広坂別館の中にはガイダンス室を新設、修復技術の動画やこれまで行ってきた修復作品を映像で紹介し、文化財の修復に関する基本的な事項を图示したパネルを準備しています。

平成28年度 開講

土曜講座

平成28年度の土曜講座は、5月7日からスタートし計33回を予定しています。以下は新年度前半部の予定です。土曜講座は聴講無料で申込不要です。どうぞご参加ください。

No.	月日	内容(予定)	担当学芸員
第1回	5月7日	絵画のなかの絵・画・図 館蔵品を中心に(1)	北澤 寛
第2回	5月14日	脇田和の世界	二木伸一郎
第3回	5月21日	「工芸」概念のなりたち	中澤菜見子
第4回	5月28日	日展と近代日本美術	前多 武志
第5回	6月4日	絵画のなかの絵・画・図 館蔵品を中心に(2)	北澤 寛
第6回	6月11日	工芸作家と古典研究(染織)	寺川 和子
第7回	6月18日	依屋宗達と臨濟禅 臨濟禅師一五〇年に寄せて	村瀬 博春
第8回	6月25日	日本工芸の源流―正倉院宝物(1)―	西田 孝司
第9回	7月2日	光琳の継承者たち―京琳派の謎―	有賀 茜
第10回	7月9日	前田綱紀と前田利為	高嶋 清栄
第11回	7月16日	久隅守景「四季耕作図」を読み解く	村瀬 博春
第12回	7月23日	日本の型紙とヨーロッパ美術	寺川 和子
第13回	9月3日	高山右近の足跡と今日的意義	村瀬 博春
第14回	9月10日	古典主義とモダニズム ―近代金工の様相―	中澤菜見子
第15回	9月17日	染織の名匠 宗廣力三と志村ふくみ	寺川 和子
第16回	9月24日	近代―日本画の豊饒なる時代―	前多 武志

新年度のテーマは①企画展や特別陳列などの展示に係る講座と、②当館コレクションに係る講座です。①では、同時開催中の展覧会をご覧になる皆様の鑑賞を深めていただきたく、展示作品の周辺情報や、解説文では窺えない作品背景についての話が中心です。一方、②の講座は、当館のコレクションについて改めてスポットを当ててご紹介するものです。各講座ではこの二つの側面を持ちながらも、担当学芸員の、展示や作品への想いなども交えた講座になるものと思われれます。

春のミュージアムウィーク

四月二十九日(金・祝)～五月五日(木・祝)、兼六園周辺文化の森では「春のミュージアムウィーク」として、魅力あふれる催しものがいっぱいです。当館では、「脇田和展」に関連し、四月三十日(土)～五月二日(月)の三日間、午前十一時より担当学芸員によるギャラリートーク、そして五月一日(日)午後一時三十分より、現代洋画壇を代表する洋画家野見山晁治氏による講演会「僕の知っている脇田さん」を開催します。聞き手はフリーアナウンサーの上坂典子さんです。また新たな試みとして、「ワークショップ」鳥の壁画を描くを予定しています(申込終了)。

文化財保存修復工房ではリニューアルを記念して、四月二十九日(金・祝)～五月一日(日)まで「保存道具と材料―技術を支える―」として文化財に使う道具を展示しています。また修復作業の様子を見学する「特別ガイドツアー」(申込終了)など、文化財へこれまでにない形でアプローチを試みます。

山崎百々雄(外郷)さんを

ご存知ではありませんか



当館では六月開催の特集展「挿画の鬼才 山崎百々雄展」にむけて準備をすすめています。山崎百々雄(山崎外郷)は本名を山崎外茂雄といい、大正三年に金沢市に生まれ、昭和六年に上京、大正・昭和の前衛日本画家玉村方久斗が主催する方久斗社で活躍した画家です。と同時に小説の挿絵画家として揺るぎない評価をもち、司馬遼太郎や池波正太郎ら昭和を代表する作家の挿絵を数多く手がけています。しかし、若くして上京した山崎百々雄の金沢での足跡については残された資料も少なく、調査もおぼつかないのが現状です。そこで、金沢での山崎百々雄についてご存知の方を探しています。もしそのような方がいらっしゃいましたら、美術館にご一報いただければ幸いです。

お客さまアンケートから

アンケートにご回答くださった皆様、ありがとうございました。展示ごとに集計し、学芸員だけでなく事務員・スタッフもいただいたご意見・ご質問を受け止めています。

学芸部門に関しては、解説キャプションをもっと見やすくしてほしいというご意見がありました。企画展で工夫をすることともに、字を大きくする。ゴシック体で表記する。等、コレクション展示室では現在、試行錯誤をしているところです。一方、あまり大きく表示することが、作品鑑賞の妨げになるというご意見もあります。バランスのよい、充実した解説を提供したいという思いは、学芸員全員に共通したものです。見守っていただければ幸いです。今後とも、何かお気づきの際にはどうぞアンケートをご活用ください。

五月の行事予定

土曜講座	午後1時30分	美術館講義室 聴講無料
7日(土)	絵画の中の絵・画・図―館蔵品を中心に(1)―	北澤寛担当課長
14日(土)	脇田和の世界	二木伸一郎普及課長
21日(土)	「工芸」概念のなりたち	中澤菜見子学芸員
28日(土)	日展と近代日本美術	前多武志学芸専門員
■脇田和展記念講演会	午後1時30分	美術館ホール 聴講無料
1日(日)	僕が知っている脇田さん 野見山晁治氏(洋画家・文化勲章受章者)	
■映像ギャラリー	午後1時30分	美術館ホール 入場無料
8日(日)	「世田谷文化人 洋画家 脇田和」 映画「梅原龍三郎―北京―」	(28分) (24分)
15日(日)	「世田谷文化人 洋画家 脇田和」 「西洋画との出会いと模索」	(28分) (24分)
22日(日)	「日展一〇〇年―目でわかる―日本の美術この一〇〇年」 「日本画の伝統と変革」	(45分) (25分)
29日(日)	映画「前田青邨と日本画の流れ」 「洋画と日本画―日本近代美術の出発―」	(29分) (25分)